

祈りなば
必ず神に
通うもの
祈りて動かぬ
ものはなきなれ

◇ 国の祈り・大嘗祭 ◇

今年の正月は穏やかな日が続き、全国の神社仏閣はお詣りが多かったようです。今、世間では日本について関心が集まるからでしょう。

日本では国ということに触れるのは一つのタブーであり、国が成すことは悪い事であると言いう前提がありました。それが少しく揺らいできたこの頃、自虐史観を抜け出る機会だと思えます。日本人として国のことを思うこと自体が、私も長い間悪い事のように思い込んでおりました。そこから恐る恐る抜け出し、人として日本人としての尊厳を持てるまで、四十年近く過ぎています。

憲法問題も外交も、中国、南北朝鮮の賠償を絡めた歴史認識。領土問題。基地問題。偏向報道。深層に反日思想を持った日本の政治家や団

◇ 渡辺博士の神道講座 ◇

文学博士 渡辺勝義

「近代の肖像―危機を拓く」(本田親徳) 前編

『日本書紀』巻第5、崇神天皇の一二二年秋九月の甲辰の朔己丑条に次のような記述が見える。

「是を以て、天神地祇共に和享みて、風雨時に順ひ百穀用て成りぬ。家給ぎ人足りて、天の下大きに平なり。故、稱して御肇國天皇と謂す」

天地諸神が大きな恵みを垂れ賜い、「五風十雨」の言葉通りに天候も至極順当で農作物も豊かな実りと収穫があり、国民の家々には十分過ぎるほどのものが充足して人々は幸せに暮らし、天下は太平であるといった有様が述べられている。

元國學院大学学長の上田賢治先生は「山や川や海は、人間の生活にとって、その生命の営みを可能にする大きな働きを持つてゐる。そこに、神靈を感じ取ってきたのである」と述べられたが、日本神話によれば、人も国土も共に神の生みの子であり、人は自然と共感し、自然の懐に抱かれて心の安らぎを覚えて来たのであり、日本人にとって

体。反日教育をしてる国との国交。これらの問題の根本に自虐史観の影響が根深く関わっており、正常さを取り戻さないと日本の未来は危うい状態です。

大嘗祭は陛下と国民が国と国民のことを神に祈る行事です。国と国民が誇りを持ち美德と尊厳を取り戻したい。針が曲がれば糸は曲がって縫われる。新しい御代には少しでも指針を正しくしておきたい。自らを卑しむ思いを祓い、子供達に明るい未来を語りたいと思います。

鎮花祭

四月二十日 十四時

疫病・難病・気の病・ボケなどを封じて健康長寿を御祈願致します。ご家族でお申し込み下さい。氏子各家とご皇室のご健勝、健康長寿をお祈り致します。

大自然はまさに神であったのだ。

人々が近代教育に毒される前は、「お天道さまが見てござる」ということばがあるように、日本人は世界に神々を感じ取り、神によって生かされ生きる喜びや神仏への畏敬の念を忘れずに、長い年月自然と共にある生活をしてきたのである。神州清潔の民、東洋の君子国と称賛され、実に礼儀正しく、質実剛健、勤勉、正直であり、また慈悲心に富み、なによりも無欲恬淡としたその日本人の高い道徳精神は、西洋人にとって一つの憧れでさえあった。それあればこそ、日本はアジアで唯一、西欧列強の植民地支配をはねのけ、明治維新を成し遂げ、近代化に成功して世界第二の経済大国にまで成長を遂げて来たのであった。

ところが、西洋科学文明に触れた日本人がこれを取り込み積極的に近代化を図ろうとしたまでは良かったが、いつの間にか西洋科学合理主義や物質主義、経済効率第一主義、個人主義などといった「近代」という異質な文化を取り込んで行くうちに、それまで大切に守り伝えて来たところの日本本来的なもの、自分たちが本来有していた自然(神)と共なる生活、その気高い精神と誇り、豊かな感性、優れた靈性の働きを喪失してしまったのである。実はこうした日本人の生き方こそ、人類共通の普遍的なものであったのである。

記紀などの古典を紐解けば、わが国においては古代より帰神(神懸り)や太占、宇氣比など、神霊と直接して神意を伺うための「神意窺知の法」がある。例えば崇神天皇紀や仲哀・神功皇后紀に見られる如く帰神の神法によって直接に神霊の「神意」を伺い、神誥(神教)を受け賜って国家的一大事を決し、神霊の御心を心として政治に事なきを期した幾多の事例があったのである。

この史的事実に深く感じ入り、中古以来途絶えていた鎮魂法と帰神術を復元し、神道そのものの本質に迫ろうとしたのが、「靈学中興の祖」と称される幕末・明治の神典学者、本田親徳である。

本田親徳(通称・九郎)は文政五(一八二二)年一月一三日、士族で典医であった本田主蔵の長男として鹿児島藩加世田(現・鹿児島県加世田市)に生まれた。天性俊敏にして幼少より藩校で漢学を修め、剣道に長じていた。一七、八歳の頃、武者修行のため京に上り、天保一〇(一八三九)年頃には水戸に遊学して当時天下に令名高き碩学・会沢正志斎の門に入った。そこで三年余り皇学・漢学など和漢の学を修め、最先端の科学・哲学をも学び、将来の学的基礎を固めた。

古典について深く研鑽を積むにつれ、宇宙の森

羅万象は靈的作用によるに違いなしとの考えに至り、古典の真義を理解するには自らが実際に神霊に直接して神の教えに基づくより他にないとの確信を持つようになった。

この間、平田篤胤(天保一四年没)の私塾「氣吹舎」にも出入りし、その晩年の学説を傍聴したとも伝えられる。それが事実であれば、篤胤の幽冥研究に関する講義も聞き知っていた筈である。後に本田は自著『難古事記』『古事記神理解』で篤胤の説を駁撃することになるのだが、それも篤胤の思想や学問によく通じていたからこそなし得たことなのであろう。

本田親徳の青年時代は諸外国の船がわが国と通商条約を結ぼうと頻りに来航していた時期である。国論は分裂し、まさに世情騒然としていた。記紀古典に多く見られる事例の如く、真に神意の存するところを知ることができれば、いかなる国難もたちどころに解決しよう。しかし、「神意を伺う」という尊貴な神懸りの神法は中古以来廃絶しており、国学者たちは理屈理論に明け暮れ、神霊に直接して神意を問うことができる者はいなかったのである。

天保一四(一八四三)年、二一歳の頃、会沢正志斎のもとを辞して京都藩邸にいた本田親徳は、京都伏見で狐憑きの七歳の子供が歌をよく詠むと

の噂を耳にした。自らその狐憑きの子供を訪ねた本田は、「お前は何か憑いていて巧い歌を詠むそうだが、どんな歌でも直ぐに詠む事ができるか」と聞くと、子供は「どんな歌でも詠む」と答え、題を与えるようにと言った。本田が一〇月の冷たい雨に紅葉が打ち落とされて庭を指し、「この景色を詠んでみよ」と言うと、子供は直ちに筆を取り、「庭もせに散るさへ惜しきもみぢ葉を朽ちも果てよとふる時雨かな」と詠んで外に遊びに出てしまった。この憑霊現象を実見したことが契機となり、本田は靈的作用について深く研究する志を固めたものと思われる。

その後、一切の世俗の名利を断ち、長らく途絶したままの「神霊と感合する道」を求め、命懸けの修行を開始したのである。本田は著書『難古事記』で次のように述べている。

「此の神懸ること本居平田を始め名だたる先生達も明らか得られざりし故に、古事記伝、古史伝ともにその説々皆誤れり。親徳拾八歳皇史を拝読し、此の神法の今時に廃絶したるを慨嘆し、岩窟に求め草庵に尋ね、終に三拾五歳にして神懸三十六法あることを覚悟り、夫れより幽冥に正し現事に徴し、古事記日本紀の真奥を知り、古先達の説々悉く皆誤謬たるを知り弁へたりき」と。

安政三(一八五六)年頃には神懸りに三六法あ

ることを覚り、慶應三(一八六七)年頃には記紀等古典に基づく帰神(神懸り)の神法を確立したという。そして幽冥に正神界と邪神界の別あること、各々一八一階級あること、憑依した霊に種類や上中下の等級・働きがあること、それらを判別する「審神者の法」、邪霊を縛るところの「靈縛法」などを明らかにし、日本古来の神懸りの神法を見事に体得・確立したのである。本田親徳が確立したこの靈学(鎮魂法・帰神術・太占)を後世「本田靈学」と呼んでいる。

その後、一時郷里の鹿児島に帰ったらしく、明治三(一八七〇)年、三島通庸の石峯神社再興創建に関する記事中、本田親徳の帰神によって不明であった御祭神の御名が明らかになったとの記述がある。明治六年頃には上京し、西郷隆盛の紹介で副島種臣と親交を持ち、師弟の縁を結んだ。副島邸で帰神を修したこともあり、副島の一一四項の発問に対し本田が幽斎の法によって回答した『真道問対』が成っている。

明治一六(一八八三)年、元鹿児島藩士の奈良原繁が静岡県知事になったのを機に同郷の誼もあって本田親徳を招聘し、二年余り講筵を開いて数多くの有志を指導している。明治一八年には『産土百首』『古事記神理解』『産土神徳義』などの著作が成っている。明治二一年、自己の御霊は静岡

日本の伝統を守る為には、皇室をはじめ日本の伝統を壊し日本の国のカタチを葬り去ろうとする、人々の言動があることに充分注意して、それを峻別しておくことが必要でしょう。

○ 祈り 古老の行履

当宮の総代会会長を三十年ご奉仕頂いた秋山平作翁。唱え言葉「吾が心清々しい」についての感想が素晴らしく、大変参考になり印象に残っております。

お祈りを始められて一年を過ぎた頃「吾が心清々しい」と唱えると心清々しくなる、「これは不思議だ、これは有り難い」と、時々言われるようになっておられました。それと悩みや悲しみ苦しみなどから心を離れなくなったり、どうしようも無い事柄などを、神様にお預けする祈りを実践されていきました。(注一)そして、「自分の人生は取り返しのつかない失敗だった、それはもつと若いときから神様を知らなかったこと」、さらに「今神様を持つている自分は幸せだ、そのことに気づいていない人は本当に可愛そうだ」と良く言われてました。

その頃から、お宮にお詣りしてくれる人が有り難いと、参拝者に声をかけられておられました。その参拝者から町で総代さんを見かけました。自分のことを覚えて道で会釈されたら度々報告を受けるようになっていました。また、私の子供達も通学中にお見かけした、声をかけられたと嬉しそうに報告して、するようになっておりました。

人は八十も半ば過ぎると、それとはなしに威厳を

今まで四名の宮司と奉仕してきたと言われました。

木原宮司は通信兵としての採用だったそうで、鹿児島で特攻隊の玉砕を最初に聞いたのは私でした。仰つておられました。戦後神道指令の下、行政から神社の管理が離されていく過程を県庁にて執行されたそうです。そして、護国神社でご奉仕され、それは並々ならぬ深い思いを込めた、祈りの日々であられたことと拝察申し上げます。

戦後から今まで、神社が見事に継承再興されたのはお二人の高い志が人を感化せしめたからであります。そして何より有り難いのは、このお二人のような希有な人格に触れ得たことであり、神社世話人や親しく参拝されている方にとってこの上ない宝(人生の指針)を頂いたと感謝申し上げます。また、このような方を輩出し呼んでおられる御神霊にますます深く崇敬の念を持つものであります。

(注一、) それは神様に畏れ多く申しわけないことではあります、自分の悩み苦しみを包み隠さず微に入り細に入り申し上げ預かって貰うようお願いいたします。大事な要点は悩みや悲しみ苦しみが消えないこと、在ることを気にせず、気がつく度に神様に預かって頂くことを忘れず繰り返すこと。何時しか心から悩み事が離れスツキリしていることに気づく時が来ます。その経験が積み重なれば、心が自ずと整理され、問題はあっても悩みや不安が無くなるようになってきます。

感じられるようになります。平作翁の場合はその親しみやすさと神々しい感じがあり、お目にかかった人々が、接する度に有り難さや嬉しさを感じるようになられていたように思います。

もうひとかた思い出すのは先代宮司の木原邦雄翁。何時もにこやかで優しくおらかな方ですが、神事を行われるときの厳格さにはあたりを祓うような場の緊迫感を感じさせられていました。平作翁が言われるには木原宮司に出会いその誠実な人物、その言動に深く感銘した、こんな人物に初めて会ったと言われて居りました。それから自分も深く信仰に触れるようになり、宮司と総代会会長として共に行動される人生が変わったと言われておりました。

お二人にはから伺った戦争体験には共通のものがあるように感じております。お二人とも幼少より体が弱く、懲役検査は丙種合格。

平作翁は同級生より遅れて戦局が厳しくなってきたら入隊でした。東南アジア(？)赴任され、ある日上官から自分ともう一人が名前を呼ばれ、「一歩前に出る、特別任務を言い渡す、次の船で日本に帰り、本土決戦に備えよ」と命令され、言下に自分もこの地で仲間と決戦を迎えたいと申し出たのですが、「これは天皇陛下の御命令である」と一喝されたそうです。そして、日本に到着間際の船中で自分の部隊の玉砕を知らされた。その時高宮八幡宮の鎮守の森の景色が浮かび、自分は八幡様に生かされたと思われたそうです。それで五十歳から九十を超える

◇ 開運家庭百日程 満行者 (十二〜三月)

第五十回満行	楠根慶子	殿
第四十九回満行	富田末子	殿
第三十七回満行	久野貴子	殿
第二十九回満行	小山田昌弘	殿
第二十八回満行	久野智教・睦子	殿
第二十四回満行	篠原キヨミ	殿
第二十二回満行	右田カズミ	殿
第十二回満行	山本香代子	殿
第九回満行	佐藤美由紀	殿
第七回満行	武井光子	殿
第一回満行	北古賀理圭	殿

四月の行事

月次祭	朔日・十五日	十四時
神道講座	六日(土)	十四時

鎮花祭

二十日 十四時

五月の行事

月次祭	朔日・十五日	十一時
神道講座	朔日(水)	十一時

六月の行事

月次祭	朔日・十五日	十一時
神道講座	朔日(土)	十一時

大萩・獅子祭 二十九日(土) 十四時

※ ここ数年猛暑の折りには、野外活動中止の指示が出ており、今年是新暦にて行います。